

発行所(郵便番号100)
東京都千代田区丸の内2-4-1
丸の内ビルディング781号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel (212) 4007・1447
編集責任者 岡沢憲夫
印刷所 関東図書株式会社
定価200円(年間購読料参千円)
1990年9月25日発行
第22巻第9号
(毎月1回25日発行)
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol.22 No.9

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No.781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan.

スウェーデン；最近の経済運営

Swedish choice on Economic Policy

前在スウェーデン日本大使館一等書記官 宇野 裕
Mr. Hiroshi Uno

スウェーデン経済にとって、緊急かつ重大な課題は、過熱下での賃金急上昇とインフレ対策である。2月の突然の内閣総辞職劇も賃金抑制策をめぐる政治的駆け引きの産物であった。政変は、いわゆるスウェーデン・モデルのクレディビリティを傷つけたが、6月に閉じられた今国会では、政府は、歴史的な税制改革を現実のものとするとともに従来より一歩踏み込んだ引き締め政策を実現し、予想以上の成果を挙げたと言えるべきであろう。

その際、特に目につくのが自由党との連携である。昨春、中央党と組んだ社民党は、いよいよ本命自由党との提携に走ったのであろうか。90年代は、スウェーデン・モデルの自由主義的再構築が図られるのであろうか。

① 税制改革

昨年11月、社民党は自由党と税制改革の基本合意に達した。既に伝えられているように、この改革の核心は、国民の勤労意欲を高めるため、累進税率を大幅に緩和することにある。すなわち、最高税率を72%から50%に引き下げ、あわせて国税の課税最低限を大幅に引き上げて勤労者の85%は国の所得税を非課税とする。不足する財源は、付加価値税の課税対象の拡大、ローンの利払いの所得控除の圧縮とキャピタルゲイン課税の強化によって補うというものである。

同時に両党は、一部は90年1月から重施することにも合意し、全体の約3分の1に相当する改革は既に実施された。そして、国会会期末のこの6月、残った法案も可決された。

② 90年度予算

政府は昨春、89年度修正予算案において、付加価値税の2年間2%の臨時引き上げを中心とした

消費抑制策を提案したが野党と労組の反対でつぶされた、(これに替って中央党との妥協により、強制貯蓄制度が導入されたが、税制改革で自由党と連携を図るため、強制貯蓄制度をきらう自由党の意を受けて、骨抜きにしまった。)

今年に入ると政府は一転して、物価、賃金の2年間凍結を打ち出した。これまた、当然と云えば当然ながら、労組の激しい突き上げを受け、かといつどの野党からの支持も受けられないまま、社民党少数単独内閣は総辞職してしまった。

しかし、この段階で政権の受け手はなく、出直しカールソン内閣のラーション新蔵相のもとで、4月始め再び自由党との妥協が成立、緊縮政策により経済の均衡回復を目指すことになった。緊縮策には、地方税率の2年間凍結、両親保険の給付改善の停止などとともに、付加価値税率の1年半1%の臨時引き上げが盛り込まれた(90年7月から91年12月まで)。フェルト蔵相は内閣を去ったが、その政権は引き継がれたのである。

目次

スウェーデン；最近の経済運営	宇野 裕… 1
バルト三国とスウェーデン	小野寺百合子… 2
SIPニュース	5
(統計) 数字で見るスウェーデン (No.8)	6

バルト三国とスウェーデン

Baltic Countries and Sweden

顧問 小野寺 百合子

Adviser, Mrs. Yuriko Onodera

(1) 戦前のバルト三国

私の夫小野寺信は、1936～38年にはバルト三国に、1941～46年にはスウェーデンに公使館付陸軍武官として勤務したので、私もそのあいだ同行して得難い経験をした。

バルト三国というのはバルト海に沿った、北からエストニア、ラトビア、リシアニアのことであって、中でラトビアが一番大きく人口も多く、その首都リガに公使以下が常駐し、他の二国は兼任でときどき行くだけであった。現在この三国はそれぞれソビエト連邦の中の一共和国である。

この三国を形成するそれぞれの民族が歴史の上に現われたのは12世紀ごろといわれるが、独特の言語と文化を持った民族集団であって国家を成したことはなく、ロシア、ドイツ、スウェーデン、ポーランドなどの攻防の地域にあたり、いつもどこかの国の領土の一部に含まれていた。

それが第一次世界大戦のあと、ソビエト連邦が出来たころ、激しい独立戦争を勝ちぬいて独立を獲得したのであった。それは1918年のことで、それから約20年のあいだ三国とも有史以来はじめて自国語を公用語とする独立国家であった。官民挙げて教育に産業に行政に努力してめざましい繁栄を遂げ、三国それぞれが歓喜と栄光の絶頂にあった頃、私どもは丁度に居合わせたのである。リガはもともとハンザ同盟の一中心都市で、中世風の美しく整った街並であったが、市の真中に自由の塔を建て、独立戦争の戦死者を厚く祀り、民族が自身の手で創出した繁栄を謳歌していたのであった。

行ってみてもまず驚いたのは、三国とも国民の上から下まですべてがロシア語とドイツ語と自国語と三つながら同じ程度にしゃべることであった。これはまさに民族苦難の歴史の証明であって、そうしなければ生き延びられなかったのであろう。

時代は第二次世界大戦勃発の直前で、ヨーロッパは平和そのものだったし、新しく独立した国には活気にあふれてそれぞれ国際連盟に加盟していた。

三国が特別に力を入れたのは、教育と産業特に農業の振興であって、余剰産物は輸出して国は富み、教育の普及は国の隅々まで民度の高いことで示されていた。私どもがリガに在勤中のハイライトは、ウルマニス大統領主催の農業祭と独立記念日の一連の行事であった。農業祭は地方都市で行われたが、スイスに匹敵するほどになった農業政策の成功を欣び会ったのであった。独立記念日には朝から観兵式とオペラ見物のあと、大統領官邸の大舞踏会までの華やかさは、ヨーロッパの大国に劣らなかった。

それが夫の東京転任で、私どもがこの地を去ってからわずか1年半の後に、信じられないような悲劇が突然にこの三国を襲ったのであった。

(2) ソ連のバルト三国併合

悲劇の発端は1939年8月23日、ドイツのリッベントロップとソ連のモロトフと両外相の間で結ばれた秘密協定であった。それで、ポーランドを独ソ両国で南北に分割占領することと、バルト三国のソ連への組入れをドイツが認めることが取決められた。もちろん当事国は何も知らされなかった。ドイツとソ連は突然に南と北からポーランドの国境を越えて襲撃して、三週間うちに全土を占領してしまった。

バルト三国に対しては、ソ連は全く一方的にそれぞれの国との間に友好条約を結ばせた上で同年10月には強制的国民投票を行わせ、国民はすべて共産党の一党政治を要望するということにしまった。その投票がどんなに不当なものであったかは、当時まだ在任の日本公使館員が語っている。

ソ連はスターリンの名で、国民投票の結果に基づき三国を併合すると宣言し、ソ連軍を三国に進駐させ、外交団を立退かせた。それがどんなに急いで行われたか、1940年6月国境を越えて進駐して来たソ連軍の兵士たちに軍靴も軍装もゆきわたっていなかったという。

それから開始されたのが三国における反ソ分子

の逮捕で、まず大統領と閣僚をはじめとする国の首脳部や各界の指導者をすべてソ連へ拉致していったが、その後の彼らの行方はわからない。次いで恐怖の「ノック、オン、ザ、ドア」作戦がはじまった。これは国民の誰彼を無作為に逮捕して反ソ分子のレッテルをはって、シベリヤの強制労働キャンプへと送ったのである。その数は各種の統計によれば、ラトビヤ人の30%、エストニヤ人の25%、リスアニヤ人の10%となっている。(この人たちは1953年のスターリンの死後、帰国を許されたが、シベリヤにおける非人道的な取扱いのために大半は既に死んでいたということである。)

三国はいずれもバルト海に面しているので、大勢の人々がこの恐怖を逃れるためリュックサック一つを背負って家族ともども小舟を漕いでバルト海を渡り、対岸のスウェーデンへ逃込んだ。その数はエストニヤ人63,000人、ラトビヤ人115,000というがリスアニヤ人は知らない。

スウェーデンはこれら三国からの亡命者すべてをキャンプに温く迎入れて、男には背広と下着類、女にはスーツと下着類、子供にも相応の衣類を給付し、食事は十分に与えた。そして彼らがスウェーデンから他国へ無事出国していくまで、またはスウェーデン在住希望者には職を得て生計の立つまで、いつまでもキャンプに暮らすことを許した。

(3) 夫とスウェーデン

夫は1940年末にスウェーデン駐在武官に任ぜられ41年早々に着任した。私もおくれて41年6月はじめシベリヤ鉄道経由でストックホルム入りをしたが、途中シベリヤ鉄道で行きちがう列車の中に男女子供が家畜輸送車にぎっしりと詰込まれているのを何輛もみた。あれがシベリヤ送りのバルト三国人であったとは、ずーっとあとになって知ったことであった。

ストックホルムに着いてみると、わずか3年前にリガで付き合っていたエストニヤとラトビヤの軍人たちに街で会った。なつかしそうに挨拶する人もあれば迷惑そうに顔をそむける人もあったが、その時私はまだあの悲劇については知らなかったのである。先に着いた夫は新しい陸軍武官宅の開設準備をしていたが、家の物色とともに新しく雇入れるコックも女中も秘かにエストニヤ亡命者キ

ャンプから人選していたことをあとで聞いた。

ストックホルムにおける夫の任務にとって最も有力な協力者となってくれたのは、同市に来ていたエストニヤの軍人仲間であった。それにもう1人同じくポーランドから亡命して来ていたポーランド将校がいた。この2人はともに優秀な情報将校で戦争中を通じて最も正確な最も貴重な情報を、夫に提供しつづけてくれた。彼らにとってはソ連もドイツも不倶戴天の敵であったから、彼らが満心の信頼をする日本へは安心して、それぞれの祖国愛をこめて協力を惜しまなかったのである。彼らと夫との関係は親友以上の盟友ともいべき親密さであった。

スウェーデンの軍部はこの人たちと小野寺との関係を承知しながら黙って認めていただけでなく、むしろスウェーデンを舞台に真剣に取り組んでいた小野寺に尊敬と好意をもって、かげながら援助してしてくれたのである。スウェーデン最高軍部と夫との信頼関係は、戦後も長く夫の死ぬまで友人として残った。

(4) ソ連邦共和国となった三国

1940年6月、完全にソ連に併合されたバルト三国はすさまじい速度で地獄の底につき落されたのであった。

ところがそれからまる1年後の1941年6月、ドイツはたった2年前に秘密協定を結んだ相手のソ連に対して戦争を挑んだのである。すでにソ連領となっていたバルト三国にドイツ軍は真先に侵入した。ソ連から余りにも痛めつけられた三国の人々は、ドイツ軍に加担してソ連軍を追払った。あわよくばドイツの支援を得て再び独立できるかという夢を見たといわれる。

独ソ戦ははじめはドイツが優勢であったが次第に劣勢となり、1944年秋には三国はまたもソ連に取返えされてしまった。それからの三国の運命はソ連化が進む一方であったのだが、すぐ近くのスウェーデンに居た私どもにも情報はまるで届かず、内情を知る術はなかった。

ようやく最近になって外国の文献が手にはいり実体がどうだったか知るようになった。文献によれば、繁栄していた自由独立国家を完全に共産主義共和国に改造するには、ソ連は1949年までかか

ったということである。私有地を全部取上げて集団農場（コルホーズ）と国営農場（ソホーズ）に変え、私企業を全部国営企業に変え、自由経済を完全に駆逐した。三国とも優秀な民族であったから、強権の下に弾圧された結果、産業実績が独立時代の半分以下に落ちてしまってもなお、ソ連邦の標準を上廻ったという。そこでモスクワは標準を越える分ばかりでなく、それ以上を搾取し去って、国民には貧困生活を強いたのであった。だが各国民が経済問題以上に憂慮したのは教育であった。ソ連は極端に民族主義を排して共産主義一辺倒の教育を押し進めたのであった。

(5) 外国におけるバルト人たち

5年ほど前に突然1人のラトビヤ婦人から手紙をもらい、会いたいと云ってきた。私ども夫婦で会って一番驚いたのはその時彼女から贈られた『ラトビヤ』という部厚い立派な本であった。ふんだんにラトビヤの昔の写真と今の写真が載っていて、記事の内容は民族の起りからはじめて歴史、独立運動、独立時代、ソ連への併合、再併合後の国内事情、海外亡命者の組織と活動など詳細に書かれている。本を出版したのはニューヨークにあるラトビヤ中央連盟であって、執筆者100人ほどの名前をみると、学者、辯護士、技術者、教員、外交官などで住所は世界中のあらゆる国にわたり、ラトビヤ人の名前が多い。

世界中に散らばっている亡命ラトビヤ人が、それぞれの亡命先の善良な市民でありながらなおラトビヤ人である誇りを堅持し、地区連盟を組織して整然と中央連盟に直結した様子に全く驚いた。この本によれば、ラトビヤ人の子供は現地の学校に通いながら土日にはラトビヤ人学校に行っている。ドイツのミュンスターにはラトビヤ高等学校があって、ラトビヤ人の子供は世界中どこからでもこの寄宿舎へはいれるという。私はこの春、前記の婦人から手紙をもらった。「私は今ミュンスター高校の教師をしている。年末年始に生徒を連れて三週間、母国研修の旅に出ている」と。私は後になってこの婦人がラトビヤ中央連盟議長の娘さんであることを知った。

戦後ストックホルムに住みついたエストニヤ人の10人ほどを私どもは知っている。夫のかつての

仕事仲間も含めて、今では大部分死んでしまったが、ほとんどがスウェーデン国籍をとってスウェーデン社会に溶け込んで相当の暮らし向きであった。中には頑としてエストニヤ国籍を通した人もあったが、スウェーデンの法律により大した差別のない福祉制度の下で生活は安定していた。

ストックホルムにはエストニヤ会館があって、エストニヤ語の新聞が発行されており、エストニヤ人の集まる場所であった。私どもも訪瑞の折には、ここでなつかしいエストニヤ料理を食べるのが楽しみであった。

夫の親友は遺言によって、遺骨はスウェーデン政府の許可を得てバルト海の母国に近い海に沈められ、遺産はすべてニューヨークのエストニヤ中央連盟に寄付された。

私どもは東京で、ニューヨークのリスアニヤ中央連盟の幹部と思われる人から再度訪問を受けた。彼の両親は当時バルト海を渡って逃げた亡命者で、彼はストックホルム生まれで、歴史学者だと云った。彼の来訪の目的はバルト三国が独立国家であった時代の記録をつくることで、自分の知らない祖国の良き時代を調査していた。その熱意にうたれ、私たちも知る限りの当時のバルト三国に在住した日本人を紹介したが、その数は微々たるものであった。

(6) 三国の独立運動

本年1990年3月11日、リスアニヤが、ソ連政府に向って独立宣言したのを皮切りに、エストニヤもラトビヤもそれぞれ、ソ連の1940年の三国合併を無効にするように宣言した。その後の経緯は毎日のように新聞の報じた通りである。

ソ連がバルト三国を支配してから半世紀、国内に残ったものも国外に逃げたものも、すでに2世3世の世代になっている。それぞれに異なる言語と文化を持った小民族の子孫たちが、半世紀の親たちの沈黙を破って強烈な独立運動を盛上らせてきたのだから、世界が目をむいて驚くのも無理はない。各民族は独立時代にはその能力を自由に発揮して、あれだけの繁栄を築き得たのだから、その可能性を親たちは脈々と子孫に伝えてきたのであろう。

独立運動のたくましさを注目するとき、三民族

がそれぞれニューヨークに持つ見事な中央連盟の組織が、きっと有力な支援をしているに違いないと思われる。そこで改めて考えさせられるのは、当時スウェーデンが各民族の優秀な頭脳の国外脱出を援けたことになる意義である。あときスウェーデンは人道的な立場に立ってバルト海を渡って逃込んできた人々を、親切に受入れたのであろうが、逃げおこせた人々はそれぞれの国のエリートが多かったにちがいないと思うのである。

しかしこの独立運動の前途は決して生やさしいものではないであらう。最大の障害の一つはあの

当時ソ連が意図的に民族の血を薄めたことである。「二度と再び独立するなどと云わせないぞ」と公言して、各国民を無差別に逮捕してシベリヤへ送るとともに、同数のロシア人を移入させた結果が今日大きく出てきたと思うのである。現在それぞれの国を構成する国民の中に独立に反対するロシア人の割合の問題である。その点ではラトヴィヤが一番深刻である。だが、半世紀の慎重な準備を整えた上でパッと燃え上った独立への炎である。いかなる困難があろうとも、もう後へは退きまい。どうか成功させてくれと神に祈るのみである。

<SIPニュース>

困難な時代に直面するスウェーデン産業

スウェーデン産業連盟の最新の調査報告の骨子は次の通り。なお、本予想はスウェーデンの主要工業企業340社を対象とした調査に基づくものである。

「スウェーデン産業は1988年に景気循環のピークを迎え、続く昨年から本年度にかけての経済動向は1985-86年度期のそれを上廻る景気後退傾向を示しつつある。

後退傾向の典型的徴候としては生産レベルの低下、在庫の増大、雇用の減少、利潤マージンの減少等があげられる。工業の総雇用は1989年度中に2%落ち込み、1990年に、さらに3% (20,000~25,000人)の減少を示すものと予想される。また、産業生産は0.5%の下降を示すであらう。因みに、昨年度の産業生産は2.3%の増加を示した。一方、生産性は、1989年度比で0.8%増の2.5%の増加を示すものと見込まれている。

調査対象となった企業は、1990年度にそれらの国内市場価格を2%程引上げたが、これは過去最低の数値である。輸出は、貿易条件が改善したにもかかわらず、量的に約1%の落ち込みが見込まれている。なお、この減少は主として、スウェーデンの輸出のかなりの部分が国際的景気後退の影響を受けていること並びに米国、英国、北欧諸国といった目下比較的弱い市場で製品が売られている部門—森林製品や車—から成り立っているという事実によって説明されよう。

さらに、多くのスウェーデン企業がその生産の一部をスウェーデンの輸出統計に影響を与える海外市場に移しているのが実情である。なお、産業投資の中間統計は楽観的すぎたことが証明された。すなわち、16%と予想されていた1989年度のスウェーデン産業の投資成長は約6%にとどまった。なお、1990年度もほぼ同様の成長率が見込まれている。」 (SIP 215/90)

スウェーデンへの移民、引続き高レベルを記録

中央統計局の発表によると、スウェーデンの移民は1989年度に、1970年来で最高値 (29%増 6万5,900人) を示したが、本年度も引き続き増加傾向を示し、第一四半期だけで13%増 2万300人に達した。因みに、これは3か月間の記録としては過去最高値である。

地域的には、北欧諸国からの移民が多く、第一四半期の移民全体の36%を占めた。その地域からの移民の対全体比は次の通り。

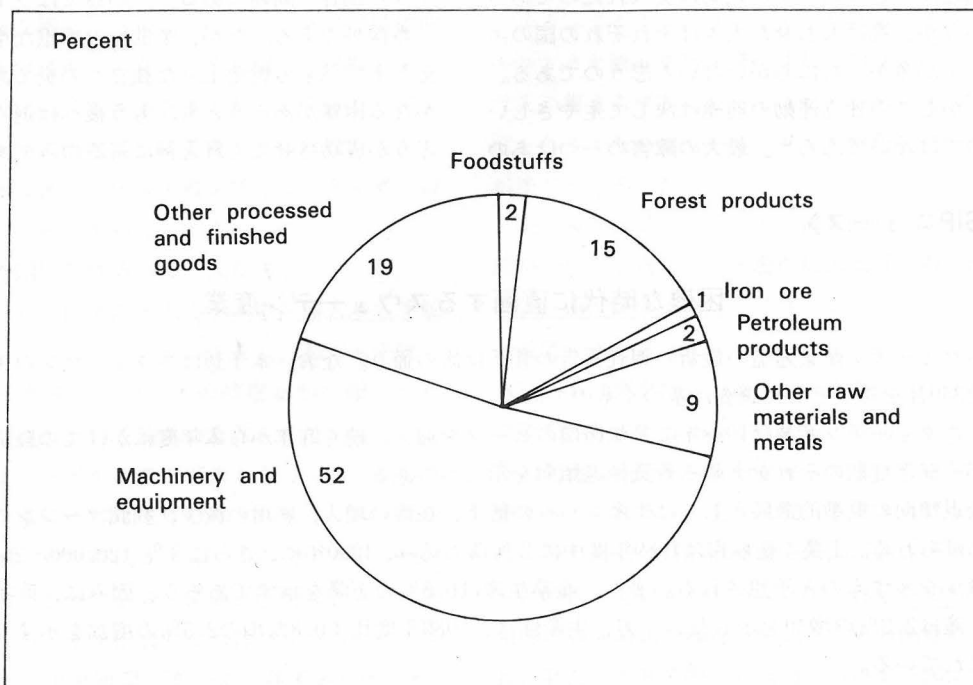
北欧以外のヨーロッパ諸国からの移民 — 17%、中東及び他のアジア諸国からの移民 — 7%。

一方、スウェーデンから海外への移民は20%増 6,000人であった。最近の我国への移民は主として、祖国に戻れない難民よりなるので、スウェーデンから海外への移民は少なく、その大部分はスウェーデン人や他の北欧諸国市民である。」 (SIP 198/90)

数字で見るスウェーデン (No. 8)

⑧輸出 (Exports)

In 1986, Sweden exported SEK 265 billion worth of goods. Since 1970 its export volume has risen by an average of 4 percent annually



Sweden's exports, by products, 1970 and 1986
Percent of total export value each year

Product category	1970	1986	
		Percent	bill. SEK
Foodstuffs	2	2	7.0
Forest products	23	15	40.9
Iron ore	4	1	2.5
Petroleum products	—	2	6.8
Other raw materials and metals	17	9	21.5
Machinery and equipment	25	52	136.7
Other processed and finished goods	29	19	49.7
Total	100	100	265.1

Sources: Statistics Sweden and the Swedish Institute of Economic Research

Since the early 1970s, there has been a notable shift in Swedish merchandise exports away from traditional basic areas such as iron, steel and forest products and toward engineering products, especially automobiles.

Services have represented a relatively constant proportion of total exports since 1970 — around 15 percent.

Sweden's share of total OECD merchandise exports fell practically without interruption from 1970 to 1983. Since then its market share has risen somewhat, returning to its 1980 level. A strong contributing factor behind this was the devaluation of the Swedish krona by 10 percent in 1981 and again by 16 percent in 1982.